利根川圖志

四

和書門
類
三六四八九
號
一二一
函
一二
架
六冊

内閣文庫
和書
類
三六四八九
號
六
冊
一一
函
一一
架

内閣文庫

番號	和 36489	
冊數	6 (4)	
函號	174	118

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak

国立公文書館
National Archives of Japan

利根川圖志巻四

下總　布川　赤松宗旦　義知　著

内一〇九一九號

印幡沼　印幡郡あり其水上い船尾村神崎橋より落ちて一方ハ佐倉の城山をめくりて鹿嶋橋より落つ下ハ安食より利根川合せ凡長さ七里廣さ二里許沼の中ふ佐久知宍まこと花嶋山等あり其外古跡多し佐倉風土記云倭俗曰沮澤爲沼此亦舊曰印幡沼又曰印幡湖此江也首尾四十餘里有舟檝之便多魚鰕之利而下引海潮宜言江而或沼或湖者鄕語爾故今以江稱焉大江千里有歌曰志毛鬪佐乃伊波能宇羅奈微多豆良之目不那比等佐王伎可羅艪於須奈李其稱浦者蓋亦尚矣其源出於神船尾之西北受二小流一自戸神佐山之間一自神平戸之間流會于船尾下廣可二一里而東流六七里至師戸會於鹿嶋橋下流而廣可二里

又東少北流七八里而至平賀自此北折彌張大而瀦廣袤十餘里浸於印幡埴生二郡而北過安食今爲燕尾以入利根川其汎溢之患常在巽風而未必在潦水焉蓋利根川東南朝海若遭巽風帶雨則自海口吹上而水逆行溢入于此焉耳江之爲景不宜于平看蘆荻遮望也宜于登臨矣其登臨者平賀爲佳飯野次之烟收水澄一鑑萬頃環浦之山如揖如坐如走如駐翠屏畫開者平賀之望也浩浩大江一條鎔銀以爲長帶水外綠洲禽飛馬風和斜日而面富士峯于且千里表者飯野之眺也凡環江村三十餘佐山也神也保品也青菅也先崎也臼井也江原也角來也佐倉也山崎也下根也飯野也土浮也萩山也飯田也大佐倉也柏木也下方也北須賀也八代也大竹也酒直也安食也俱連印東而起於乾繞于兌離震以終于坎焉船尾也松崎也吉田也巖戸也師戸也鎌刈也瀬戸也山田也平賀也吉高也松蟲也萩原也中根也笠神埜原也卜枕也皆連

印西而起終田繞效印東者焉吉高東可二里江中有二穴一北一南相違四五十步徑各可五十丈水色深玄底不可測旋渦甚急舳艫難過村民謂之佐久知穴佐久知鰯魚之小者時集于此穴下網取之無數故名焉北須賀以北江上夏間陰濕之夜火出水中離水數尺非漁火非鬼火須臾分散或五六十或百數十若往若來或索或聚乍遠乍近又高又低以窮數時而滅焉亦江上一奇也

田國雜記標註卷上云九月廿八日稲穂の別當ゞ坊ふく湖水をなゞ見と 文明十八年丙午也

道興准后

山色湖光烽又窮　鄉書曾不託飛鴻

砧聲近報孤村晚　旅懷何堪憂患躬

又云ゝふ小春ゝ　ふやいさゝうのどうふ侍られてみちく

いふぼの湖水ふうゝびく舟のうちみて酒ふと真行ゝ侍りき

冨士の孫湖ふうつれる心をゝふくよもゝさよゝ申られバ

あうみの波間ふうげをやどーきて又あぐひあるふーどをえるこうふ道興准后後知足院関白左大臣屏風公ノ賛三ヶ道興法弩大僧正准三宮三山并新熊野検校聖護院

土産　鯉　鯽　鰻　鯰　鯔　鮠　腹赤魚

サイ　マルタ　鱟　海老ツノガラエビ中エビ　スカエビ　蜆　田貝　瑇瑁アリ

ゲバチ　魚譜ふギバ鯛魚一名黄頷魚とゑゆナマヅふ似て少背及び腮の下の鬚ふ人手とふるきバ蟹て甚さ痛む此魚を捕れバごさくと啼く此魚近年至て少ふ物類称呼ふ按ふ享保十三年戊申の秋東國所々洪水せ頃をこの魚ゆふ一ニさくて後鯰多く成ハうこぐふらくハギバ鯰ふ変じてるものあるゑとそう実ふさもと思ハれてをり

水鳥　雁　鴨　ヒス　ナガ　ハジロ　タカ

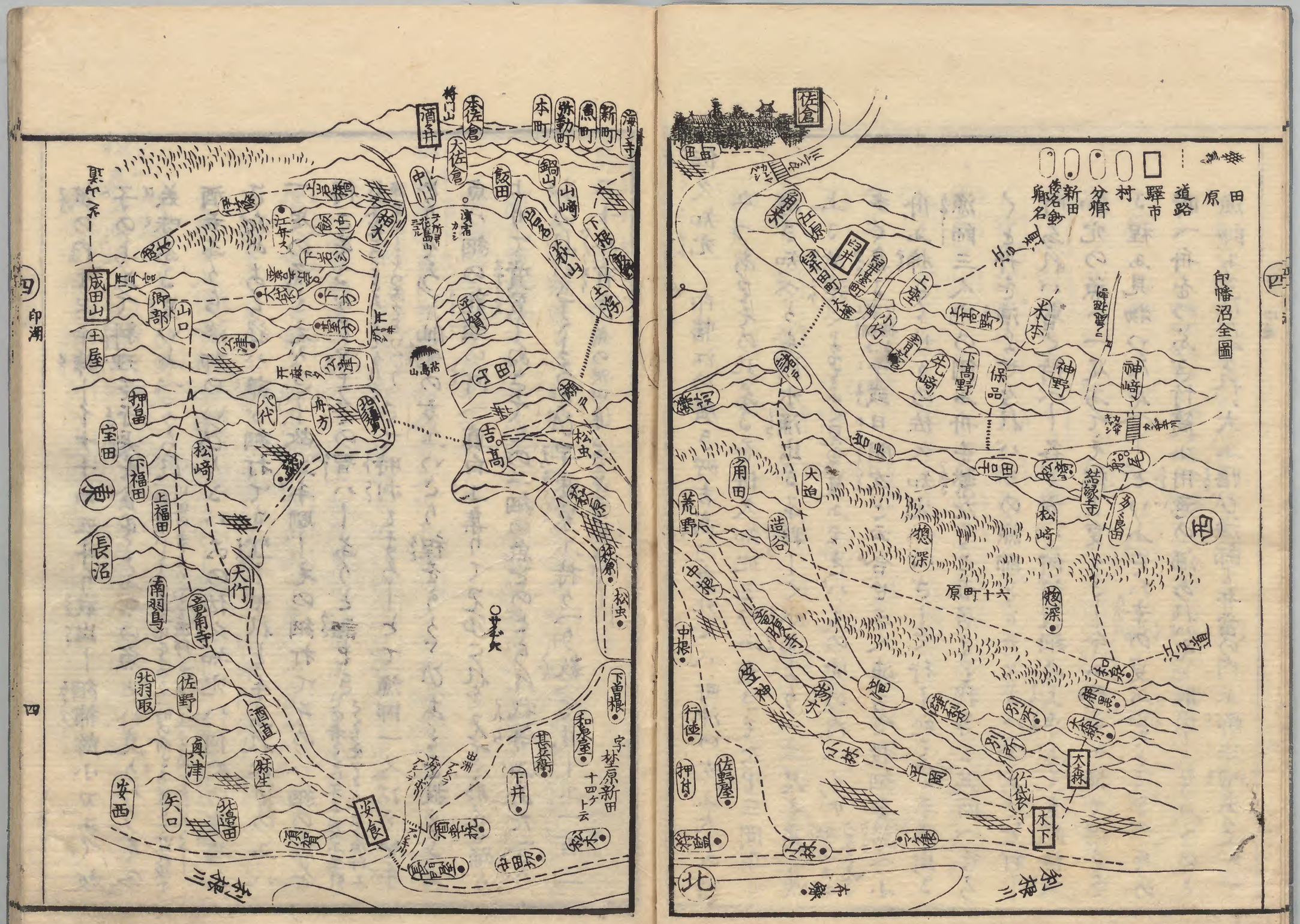
ブ小鴨　アヂ　鷺　鸕鷀　鵜

水草　菱　真菰　蘆　蒲　荻　川骨　澤瀉　スゲ　あどの類

左多ー

此外雑鳥数多ー

佐久知穴　印幡江の廣き所吉高の東北七八町沖の方ふ大小の穴五つあるその北ふるを佐久知穴といふ大さゑたゑ三間斗り深さ知べうらぶ水涌出るゆ夥ーく水面より一二尺そ高く吹上る故遠くよりよく見る夏ふ至るバこの穴の内へイナ鯔のふるもの長さ六寸多く集る投網ふ捕る予或日朋友と云合せ三人連ふて投網を携へ小舟ふ掉さくせうの佐久知穴へ心ざして行ー処さあく平常出る漁師三人穴の側ふ舟を繫たゑこ呑居さゑ我等も其所へそろくと舟を漕よせられバうの漁師ども云々ふハ今あこを打ー所ふれバ暫く待べー各々方ハ何程投網の上手ふても此佐久知穴の魚ハ一疋ふてそ得る事うこー今ふ我らが捕て得さそる程ふ見物いたゑべーといふそハ幸の事ふこそとてそのそ所へ舟をつふざ竹筒ふ用意の酒あれバそを取出ーおのれものこ漁師ふてをたへられバ大ふ悦び漁師も弁當の内ふ酢味噌あるとて


印幡沼全圖
田
原
道路
驛市
村
分郷
新田
倭名鈔郷名
佐倉
酒井
大佐倉
中川
飯田
本町
新町
鍋山
山崎
下根
成田山
御部
山口
土屋
押畠
室田
下福田
上福田
長沼
松崎
大竹
南羽鳥
高角寺
北羽取
佐野
真津
安西
矢口
北畠
特生
酒直
安食
吉高
平賀
田子
松虫
下井
下南根
和泉屋
佐野屋
行徳
押付
中根
荒野
角田
造谷
大迫
惣深
結縁寺
多古
神崎
神野
保品
下高野
米本
上総
行方
大森
木下
行袋
六十町原
字埜原新田
十四ケ下云

飯の内よりも今捕しイナ十四五斗り取出し網補飾小刀ありて板子の上にて料理せ予是を食せるに常の魚とハ異りてその美味なる事いふべからず一脉紫ハとゝと直ふ死せるゆゑ一時の間も活置ことゝ叶ぬ故ふ川辺の者とゝ漁師ふらでハ生なる魚を食事なし

酒呑あらら漁師のいひけるハあの佐久知宛ハ何処の漁場とさだめあらず誰ぞ網打ても宜しそれど手ふれぬものふハ一疋の魚もえぐ〳〵故ふ手馴しその網打てその一網の魚を得させるぞもとよりその習ハしありと語りさこの者とゝハ年々夏ふ至れハ漁業をなすものゆゑとゝいふり

さて時刻もよろしとて漁師一人ほこを手どりそろ〳〵舳先の方ふいさり程をうゞひあこを投けるふ魚ハ網の龍頭の所へ眞白ふ集りてそゆこれをうてこ船人々踊り上りて賞賛しぬさてこの一網の魚とのこらず我等ふあたへらおのれいてくよろこび早速家ふ持ゝり數へて見しふ一百二三十斗有き魚の沢山集る事是ハて知るべし

鳥見ヶ岳

印西萩原村ふあり鳥見大明神の社あり佐倉風土記云所祭饒速日命相殿神御炊屋姫命味間見命也有永禄中之梁簡元禄中祉司石井氏請吉田兼敬卿奉正一位焉

常陸風土記云鳥見岳是ナリ

松蟲皇女廟

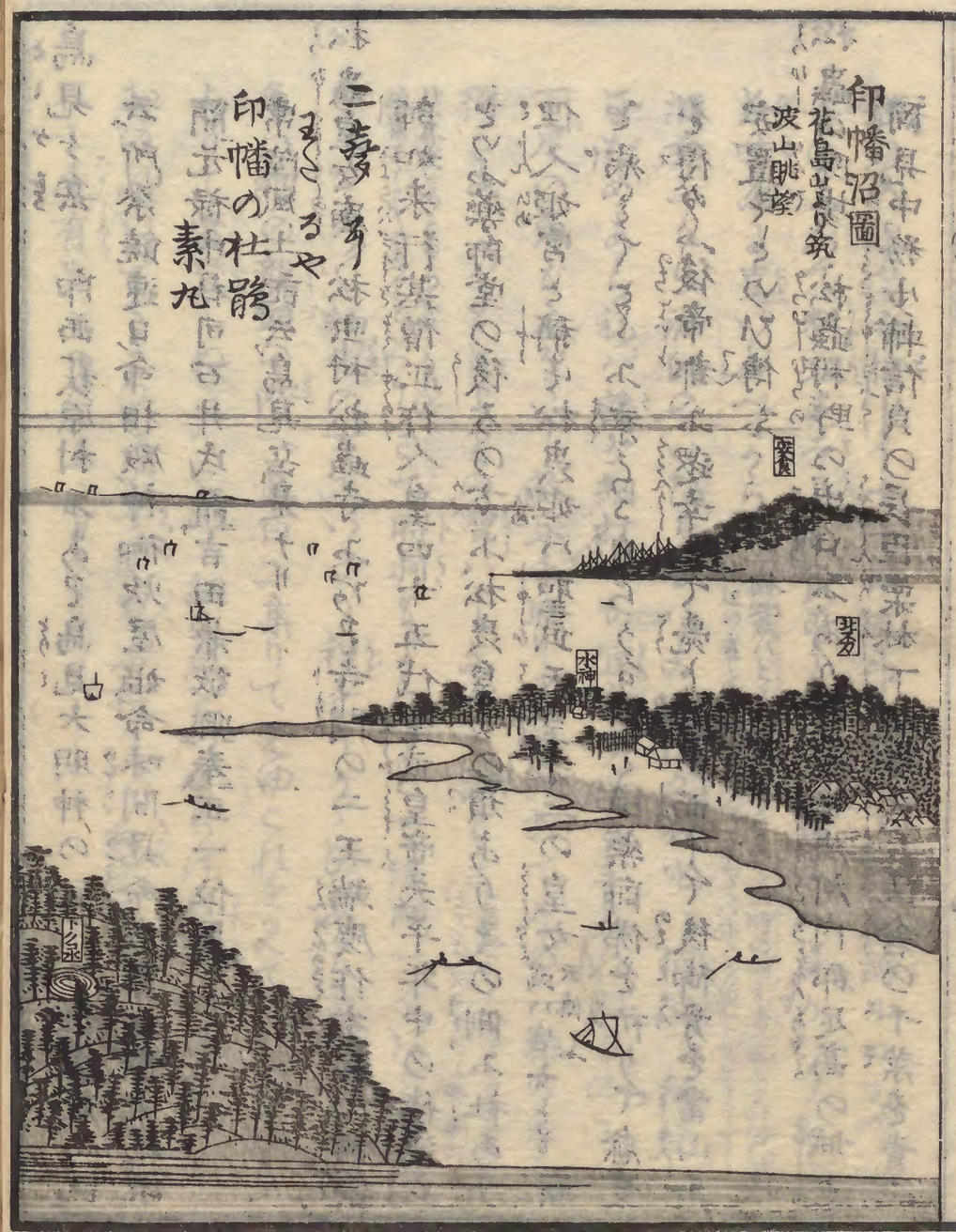
松虫村松蟲寺ふあり寺門の二王端慶作本尊七佛藥師如来行基僧正作人皇四十五代聖武皇帝天平年中の御建立とふ藥師堂の後ろの方ふ松虫皇女の墳ありその側ふ社ありぬ人姫宮と稱せ松虫姫ハ聖武天皇第三の皇女或ハ宮女とも云傳ふ癩病にてこゝふ棄らる自らうゞ〳〵しく藥師佛を祈りて愈事を得ゆふ後帝都ふ還幸して薨じ給ふ而して後御骨を當山ふ安置せといひ傳ふ

松蟲の陳場

松蟲村野の出口ふあり古ハ常州河内郡足高の城主岡見中務少輔信貞の長臣栗林下總守義長佐倉の千葉を責ん

印幡沼圖

花島山より筑波山眺望



二夢ものがたるや
印幡の杜鵑
素九

と軍勢を催し布川より利根川を渡し布佐の砦ふハ押への兵を置笠神小林と戰ひ而して此所ふ陣を
常總軍記巻二十云かくて義長兼ていハ瀬戸へ出て沼をめぐらを
出水より佐倉へ押つけ有無の合戦をもべーと号令せしめ々
るふ松虫の墓ふ陣し人ちづまりて義長心ちづふ軍氣天文
をうんぐみるふ義長大ふ怒りーー海老原次郎を近付東の方
へ回ぜさして今佐倉の方ふ向つて一行の赤氣西北ふ靄く
我察をるふ千葉勝胤今度義長此道を押来る事を知て道筋ヲ
堅固の要害を構へ當手の勢ふ乎間とらせ日数を經る其内ふ
引ちらへて香取郡へ打出小見川及ひ高田松岸を越え利根川
を渡つて常陸へ逆寄をへき斗策此雲瑞ふ歴然さを去バ此所
ふ心を迷して香取郡より攻入らきんハ以の外の大事成べー
潜ふ兵を引取て高田ふ出て敵兵を防へきあを去ぐら千葉

佐倉の様子を知を得ぐさし左細作を出して是をさぐるを雖
ども今明ふらぐ如何せんと思ふ我今ト筮して是を見るふ
雷澤歸妹の卦也是味方ふよき助けの人来るべー中畧ふ
尾張國小河の住人小河左馬次重知といふ者ハ彼ハ清和源
氏の正統左馬頭滿政の後胤ふして名家の末ふりしを左知謀
を兼備しいまぐ年若ふを共武者修行として関東へ下り
上野下野を經て常陸の水戸ふ有を夫より千葉ふ来る其時ハ
千葉も静ふあを共れバ武をミぐく事も遠ざくきり暫く足を
止むべらりぐるぐ千葉の老臣原式部小河を臣下とせんと二
千石を与ふべーと也しぐ小河が心ふ叶ひぐ陪臣と呼きん
支本國の聞えもいぐ有りと思ひ是を辞して東海道を上ら
んと思ひぐるぐ岡見の老臣遠藤又右衛門ハ相知きる者ふり
しを今度義長といふ者を軍師として兵を千葉へ出そと

はるゝへ聞くたとひ遠藤此軍中ゑならずとも知る人のまゝ
あれと尋問せざるも残り多しいつれ彼陳ゑ至らば遠藤ゞ安否
を知るべしと思ひしらば印西へ渡る斯て義長ゞ陳ゑ来りて
遠藤を尋ゝるゑ二の手に大将として此陳ゑありゝまを小河
大ゑよろこび對面してむかし〳〵今の物語せゝゞ遠藤志ばらく
小河を止て義長ゑ委細を物語に義長さてハ味方ゑ吉瑞有と
見えしハ小河ゑらんと思ひ對面をべしと有ゝまば小河も辞
をべきゑ所ら孫バ遠藤と共ゑ義長ゑ本陳へ行て謁しゝるゑ
義長ハ小河ゑ姿を見るゑ其長六尺餘ゑして年末ゞ三十ゑた
らぬ勇猛無比ゑき男ゑきハ頼もしく思ひ酒ゑんをゑして後
千葉に様子を尋ゝるゑ小河申ゝるハ千葉勝胤當時印幡郡
佐倉ゑ在城せり斯て其近郷盡く守衛を置たるまゝ下總香取
郡を籏下として右家臣を交へて堅む滑川ゑ織田左京助崎ゑ

内田信濃寺臺ゑ貝室加賀大倉ゑ二条大内蔵小見川ゑ栗飯原
左衛門小見川越前守千葉東郡ハ一圓ゑ東の六郎是又隨一の
連枝ゑして強勢の者ゑあれ其上六郎大力ゑらびなく早業の名
誉荒馬乘ゑして大太刀を得たれ弓ハ楚の揚由を欺き大剛ゑ
して流をゑつけ寔ゑ大將の器なる事千葉ゑ肩をゑゝぶる者
更ゑゑし又米の井ハ木村能登吉沼ハ地涌監物長沼ハ大野修
理原坂ハ平外記荒海ゑハ荒海左衛門大竹ゑ大竹次郎兵衛飯
岡ゑ飯岡勘解由馬加ゑ馬加七郎船橋ゑ布施五郎鷺沼ゑ木村
十太夫大須賀ゑ大須賀四郎是勝胤ゞ圓城寺ゑ村田筑後圓城
寺備前村田臺ゑ村田兵衛山部ゑ山部八郎左衛門森戸ゑハ森
戸五郎宮戸ゑ宮本若狭川村ゑ川村大炊岩尾崎ゑ只越義濃神
崎ゑ大和太郎左衛門出水ゑ大谷半左衛門藤崎ゑ藤崎隼人同
四郎左衛門飯高ゑ飯高播磨同十郎鏑木ゑ鏑木日向同次郎左

衛門。櫻井ハ櫻井式部。神大寺原ハ石上外記。石橋ハ石橋大膳。同若狭。小石橋ハ伊藤平次左衛門。同與市郎。高井灘ハ大野弥左衛門。吹上ハ風間平右衛門。同平十郎。一ノ分目ハ高野内匠。二ノ分目三ノ分目同人。ふり。木梨ハ木梨内匠。同善左衛門。森本ハ森本平太夫。廣岡ハ廣岡縫殿。青木ハ青木土佐。伊能尾ハ伊能尾越前。同勘解由。同四郎左衛門。伊能尾山ハ山崎主税。金田ハ金田刑部。神々廻ハ神々廻丹波。惣深ハ惣深六弥。林ハ林飛彈。鳥井ハ鳥井筑後。同惣右衛門。其外藤田對馬同縫殿之ノ。武田左近。芝田宇右衛門。久古主斗。秋山内記。中野ハ遠藤左兵衛。布鎌ハ布鎌但馬。九岡喜一。同彦市。垣生ハ垣生大和。迎瑳ハ迎瑳四郎。宇津野又市。宮小四郎。同圖書。臼井ハ臼井次郎。成田ハ成田八郎。天野弥太夫。長澤ハ小倉入道。同次郎右衛門。秋山蔵人。佐原ハ木内八郎左衛門。高橋藤兵衛。小野傳八。竹川圖書。飯田新八郎。松崎久内。椎名ハ椎名

丹後。岡野内膳。澤田五郎左衛門。高橋弥八。竹内兵部。羽川四郎左衛門。田口ハ田口刑部。其外あけて筭へ難し。又香取郡の多古高岡ハ舍弟千葉頼胤あり。生實より北ハ千葉の内ハ。て老臣原式部在城せり。ゑ安食ハ松田藤右衛門。大竹ハ大竹平次左衛門。萩原ハ萩原登弥太。吉高ハ吉高代ノ。吉橋ハ吉橋中務。笹川石見。其外松岸本庄高田以下をくて其數五十八城八十八館砦九十三餘ふり然るハ今度香取郡ハ出張して高田を渡り直ハ利根川を越て常陸ハ働くべき評定の候なりきバ此所ハ陳し給いん事詮ふるべし若利根川と渡し常陸へ乱入せバ脇を吹とも甲斐あるまゝ今度香取出張の主將ハ彼東六郎鎮胤を以て惣轄とし二条大蔵太夫鳥居筑後。村田兵衛次將として一万餘騎差到ふ。中畧御評定ありていそき高田へ陳をうつされ然るべき哉と申ケり。義長聞てさこそ有べしとれ昨夜

天文を考へ尚ほ雲氣を見るに赤氣西北をつらぬけり。こゝを其さざゝ也。又ト筮せしむるに味方にたゝけある卦を得たり。是貴客の物語を聞べき善卦なり。今は疑べからゝをみやゝに陳を高田に移して戰ふべし

下略

吉高代々城跡　吉高にあり掛鼻といふ山の上なり。東に印幡江を眼下に見おろし風景至て美なり。西に御門坂あり。南に家老内和田屋鋪など云地名今猶存せり。其外口と唱ふる地名甚多し。和田口南口西口北口丑口坂口野口向口向路口城田口殿田口向田口鶴巻口馬草田口等あり。北に船戸南に蕪田河岸あり是舟ゝ北須賀へ安能橋へ山田村へ行堤の中程にあり

吉高鮒　名物なり。金色にして骨堅し。肉ちりして味美なり。此鮒をとるに一種の漁業あり。冬の漁まづ一人小舟に乘り水浅き所を棹さしあるき舟を蹈て舟を左右へ蕩揺せの

浪音におどろきて鮒は藻の根に隱る。その水中の濁るを見て手にて是を握ことゝる。故にてどゝ鮒とゝいふ。萬葉集のモブシツカブナ是なりの義なり

カ

ハボタル　俚言にカハボタルといふもけあり。亡者の陰火なる由。形ちまるくして大さ蹴鞠の如く。光りは螢火の色に似たり。夏秋の夜あらはるゝ雨の夜に至て多し。水上一二尺離れていくつも出て遊行をるが如し。或は聚り或は散ト又は高くまゝ低くまゝ時は矢のごとし。久雨の節は夜ふく多く是をみるゝ花嶋山へ龍燈の上ることゝなり。さく陰火龍燈のたぐひ種々の書に多く見ゆ。詳なるは春暉外見録に西遊記にあり。筑紫のちらぬ火。越後國新道村飯塚氏の咄し。牧之老人雪譜に出したる頸城郡米山の竜燈なり。又一奇説を擧ぐ。義知壯年の頃印幡江の邊に吉高和名抄に云印幡郡吉高にあり。と云頃は五

月の未ゐ刻より朋友来りて云ふやう。今宵ハそらもよきて
いと静かれバ慰ミに釣に行べしといひけるゆゑ予も幸の事
ゐなりと思ひ早速仕度をなしの二人連立河岸に行手ふく小
舟ふうち乗江の半に至り朋友の舟と十間ばかり隔て棹つき
立舟を繋ぎ釣をたれて居ゐ居ゐるふ寂早子刻ともおぼしき
頃俄ふ空かき曇り。勝膳として物さびしく程なく大風吹起り。
雨降いだし誠ふちんの闇とぞなり居ゐる朋友
の舟も見えなくなりぬ。ハいぶかしと思ふ内遠水中より
一つの青き火閃々と燃あがりぬ是ふんりの亡者のカバボタル
んと見居たるふたんくとなりぬ。逃うくうんと思
へども風ハよくきバ舟を動かす事もあらば。衣服ハぬきて戰
慄そろふ心をまづ先朋友と呼んとすれど更ふ声も出ず。何如ハ
せんとたそらふ内がハボタルハ舟がふねの舳さきふ乗たり

六ハふふハトと思へども是ハ目をとぢて一心
ふ念佛をなるのくゐる。暫して雨やミ風ハちと静まりぬれハ
ハぐと目ハ開きたるふ。そもやカハボタルハ何處へか消うせ空
を少し晴て朋友の舟をもの處ふ居ゐりこれとそれとそ
ゐをいざ。今のカハボタル残見しやと間へバ。我もみたれ共
おそろしさふ物も云ハんと答ふ。やうく人心地付て早々我家
ふかへり来りぬ。翌朝漁師ども大勢居たる所ふて右の咄しをく
なくく物語せしふ猟師ども云ハるハ。其くらゐの事ハ度々の
事ふり。我ハ一昨夜漁ふ出しふ彼カハボタル我り舟ふ乗たり
其時ハ大勢ゆゑおそろしとも思ハず。舟掉を以てからふ任せ
打ゐきし所碎け散て舟一面ふ火とゐるを塗付ゐる如くその
鯉さ支壁ふ屠き物ふ。其質油ハ如く阿膠の如くぬるくゐ
くとして落ぞ。みるく打寄りやうくと洗ひ落しぬと大勢の

物語なり。又其内一人の云ふるハ。四五年以前の支ふるがとき或夜投網うちけ艫漕ふ出し一所彼カハボタルいくつともふく出來ぢ舟近くふハくと飛そぐる。網とりハ剛氣の男ゆゑ此時小声ふて我ふさと〻紙を我もうふづさなぐら舟戔廻らしうのカハボタル戔追うけまハす。網とりハあらを小脇ふ引ろまく。舟の舳さきふ突立あぐり手頃を見さだめて投げ網投ふたがうぐカハボタル一ッ戔打かぶせぬ其時を腥き支いそん方ふく。網の中ハ一面ふ青ち火とあり。ぬるくして落次。いかんともせぐきやうなく手ふてえみ洗ひそれば其手二三日を腥かるー故。一昨夜ゑ大勢ふて舟戔洗ひーが我ハ以前あり て居ーゆゑそきと云次手戔舟ざうーといひく大ふ笑ひぬ。のカハボタルといふそれを生捕てその形貫戔あらハ志ーハ印播江の猟師ふるべー

花嶋山　印幡江の中ふあ。平賀村ふ属ち俗誤稱離島無離僕訓相近ぢ此島へ舟ふて渡り一由云傳ふきど。今ハ田畑とふれり。島の廻り一里といくり。此絶頂ふむろー寺あり大日本寺といふ。今ハ不動堂と竜り堂のミ殘きり。弘法大師護摩修行の古跡ふもとて護摩檀塚獨鈷水東の方山のなど今ふ存在せり。山ふ十六峯ハ谷ありと云ざて此山ふ登きバ西ふハ富士南ふハ佐倉の城山將門山東ふ當りて成田山北を望めハ筑波日光の山々ハ北須賀村水神の洲嵜ハ。江の半ふ蛾眉を ふ。往来の高瀬船ハ白帆ち揚てハ方ふ乘ちぐへ。數萬の漁舟ハ柳葉ち ちらちぐ ちとく千勝万景應接せるふ遑あらぐ。誠ふ北總第一の勝地ふるべー

潮ハ波ろ〻ハ蕎麥の花　梅麿

雨祈　文政初の頃印西の邊ふ名をト童と呼禪宗の僧あり。年十九歳ふりといくり。元來何きの弟子ふり有りんこふ漂泊ー来り

て二三年ゟ成ぬ。其性いとろて愚鈍ゟて常ゟ道路ゟ嘯唄ひ宿を需めず。稠下祠堂を栖とせ。三伏の暑月ゟ綿入ぬのこと着て暑しとせず。蚤蚊といと矣。嚴冬素雪の寒さ夜も草物ゟ半天一衣。尤麻の破き衣ゟ常ゟ腰ゟるどひて故さま食を與ふるゟ二椀の外を食ひず。二椀食して後ゟいゞさある珎味を出すとも更ゟ手ゟざも取らず。酒宴の席を嫌ひ又小童壯年のその紙ゟらふを煙草ゟ火藥を交ぜ食物ゟ蕃椒を混ぜ戲ゟ是とあたへ困ゟましむるゞ故なりとそ飲食の外一物をもたゟざるゟ實ゟ愚直の者と云べし。或年の夏此あらり大旱して利根川を初め所々の江沼も涸水高瀬舟の通路も絶え井の水ゟさて國民の憂へ大ゟたゟゞ。是ゟ依て地頭領主ゟも諸寺諸山ゟ仰せて祈らせられ村々の農民も種々の事をゟして雩ゟるゞ其驗ゟし時ゟろト童云るゟ印幡江の中ゟる佐久知宛ゟ竜神住ゟ是

を頼み祈とゟい忽ち雨降ゟ早々墓を作りてえさせよと云。所の者でも大ゟ笑ひこの魯鈍ゟる乞食坊主何事ゟ知らくゟい虛言を申出し人の心を欺くなゟんと叱りられべゞやゝ疑ふ支ゟゟき我數年ゟの竜神と友たり。依て竜神をたのむの法ゟ知きりと更ゟ聞入きず。此事強て望みられべ所の者共ゟ長々の旱魃ゟて困ト果たるをりゟれべ。すゞ彼ゞ意ゟ任ゟとて。ト童ゞ言葉ゟ隨ひ。佐久知宛の傍ら江の中らゟ墓ゟ作ゟてあたへぬ。ト童是ゟ注連を張り四方ゟ青白赤黑の幣ゟ建種々の物を備へさゝゝト童ゟの墓ゟ上ゟ突立あゞと高声ゟ云ゟるゟ。此度天災大旱魃ゟて國民の飢渴見るに忍びず是ゟ依て愚僧ト童一七日の間飲食ゟ断禁し佐久知宛の竜神ゟ祈る。希くゟ大雨を下し衆人の飢渴を救ゟ志を。若七日ゟ及んで雨降らずんゞ愚僧再び生て歸らゞ。佐久知宛へ身ゟ投ト竜神の栖ゟ

穢さんと云早てどつうと座しそのとも云うべ座禪の躰ふぞ見えふりる。所の者共是までい欺むゝると思ひ居たるがこの誓文我聞よりも大ふ驚き皆々あんどくらしてゐたりけり。偖ト童雪我初名しより久ふで七日ふ及びけれども未だ一えうえ我ト童が死る日ふきと皆く案ど煩る所ゝのト童ハ國の憂民の苦難我救ハんと命を懸ての祈りをふきばその至誠の感ふや有りけん。其日午刻より俄ふ黒雲舞起り雨降出し追々篠とたく如く車軸を流してふりふれば。所れその共大に悦び長くの飢渇の苦しゝ今一時ふ蘇生したる心地ふりとて踊り上つてよろこびあくり。

夫よりのト童へ何をゝ恩賞そべきと相談せしゝ元より無欲の僧ふして金錢ハ手ふだも取らず二椀の食を乞のみふて心ふ望みるきゝ〻あれば其べきやうふく斯てト童ハ五七日たゞ草物一衣ふ麻の衣と謝しゝ為りとぞ。

此邊を漂流せしゝ。それより何地へ行ふりけん曾て眼ふ掛らで所いとのども甚だこゝ我奇ふりとして疑ハざるものハふく

ゝ

瀬戸渡　上浮瀬戸の間ふ佐倉風土記ふ水上三百九十丈と有同書関宿路の條ふ在佐倉乾驛十佐倉至瀬戸八里此間有土浮渡船六百歩瀬戸至荒野六里荒野至滝九里滝至木下六里木下至布川六里此間有利根川布川至小文間歴崖宿守谷絶七野川過内守谷岩井百戸而達関宿

印西産物

筍　蕨　茨茶所々在焉先以巨鑑刺古松根從擊之初草所々出種類最多

松露所々出春二三月間松陰土壌生之狀如彈丸外褐色内白香脆味美氣如松蕈或曰陳仁玉菌譜所謂麥蕈者是也未詳是否松露ふ二種あり米松露と云ハ色白くして柔ふりて栗松露といふハ色黄黒と帯で堅し是下品ふ又二十年以前までハ猪鹿兎ふど甚だ多ふりしゝが近年一疋をゝさるとふし

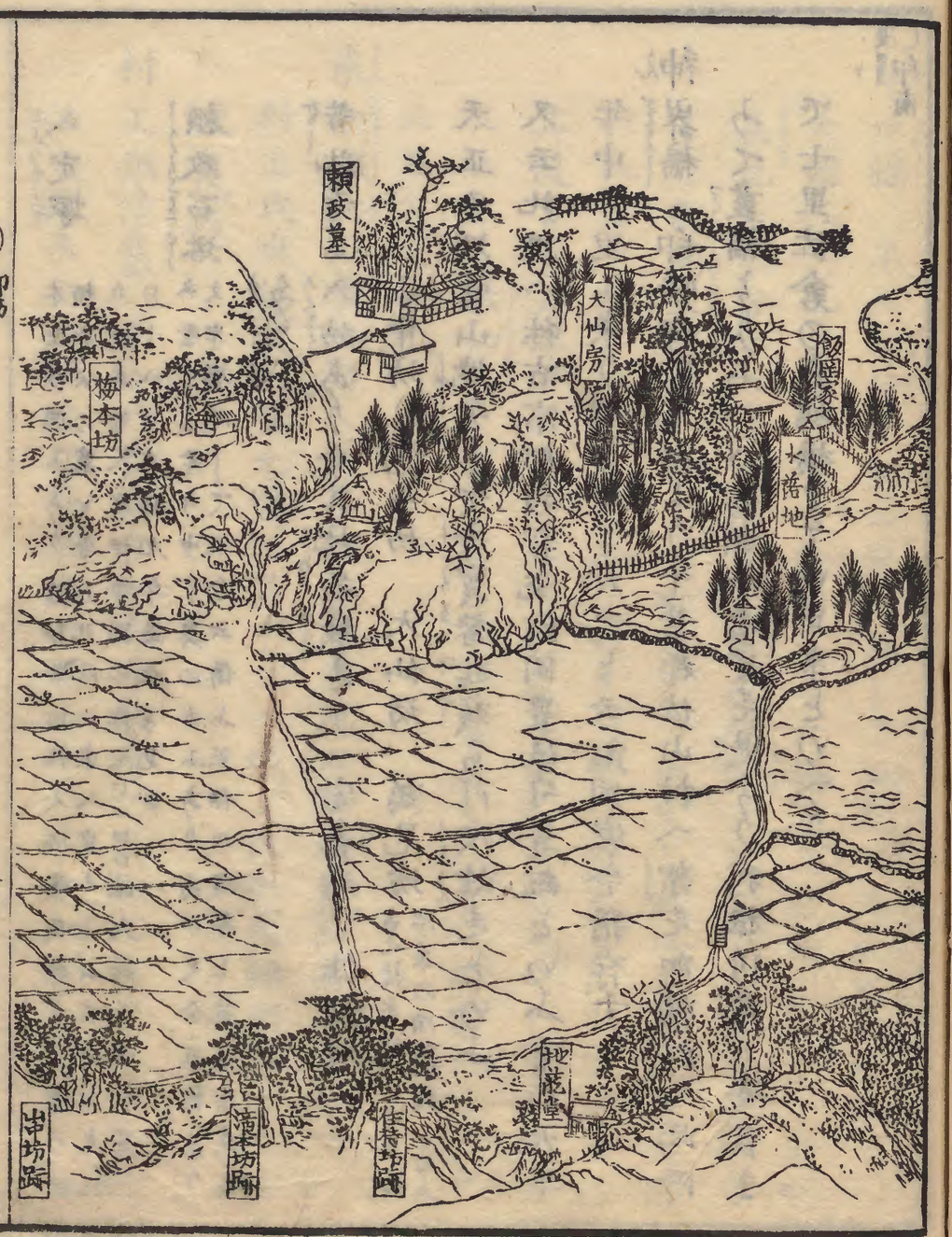
師戸渡　師戸の井の間ふり佐倉風土記ふ水上三百九十丈とゝ云たり

巖戸堡　岩戸村ふあり佐倉風土記云距佐倉西地八里六丁岩戸五郎亂安居之志津亂氏攻之家族皆死後頻有鬼哭燐火之怪白

井圓應寺僧誦經止之因建寺今西福寺即是而其堂前紅梅則記
亂妄父子及妻所自殺處云東國戰記所謂岩戸城主岩戸五郎與
吉田渡吉田より保品へ渡るに水木茅田と經大和田新田舟橋ふ迄
源頼政塚結緣寺村あり佐倉風土記云傳治兼之亂頼政敗死
于山城宇治遺命於其家士唱競二人曰負吾頭牽吾馬向東國去
吾欲止處當重心座其地期以五旬過期而無驗則乘之二士奉囑
東行二十日而至此覓甚重遂座封之植狗骨樹且建堂二士俱爲
僧居此既而馬斃埋之栽櫻號名馬墳又有雜墳在桑橋臺距家南十里許
此亦頼政所畜來此而漬云按唱競東去不見于平家物語盛衰記
等但頼政首座于下總弘古河在只碑而事似此所傳然不審孰是
焉更有一說頼政茅深栖三郎光重其子陵助頼重共居下總九郎
義經小年來此俟金賣橘次而往陸奥國事見于平治物語而橘次
所寄之佛具在隣村瀧村瀧水寺又近村中根濱印播江處有橘次

兄弟墳而傳其爲盜所殺則頼重之居必在此邊今曰御所柵者蓋
近是焉所謂墓及堂似於頼重之所建恐後人彼此附會爲之說耳
併記意見以俟重得明徵矣
柳晴天山結緣寺八人皇四十五代聖武天皇神亀年中行基僧正
の草創と云本堂南向六間四面本尊阿彌陀佛ハ行基僧正の作
側ふ金像の不動尊を安置云御丈二尺餘嘉元元九月十五日願主擁律師瀧尊と云
鐘あり新義真言臼井實藏院末寺あり境内ふ花井戸扇の芝あ
り鐘出現の池ハ本堂の向ふあり一說ふ其後治兼の兵乱ふ源
三位頼政平家の爲ふ生害ー從臣下總國の住人下河邊村藤三
郎清恒と云者御首を貰來り此所ふ葬り奉り剃髪ーて一宇建
建給仕ーたりふといふ
頼政塚本堂より辰巳の方三丁斗山の上ふ有
名馬塚本堂より未の方二丁斗ふあり櫻の大木有て道路を覆
公役を其木をうゑげとり

結縁寺村
結縁寺光
頼政卿の墓



入定塚　本堂の側ふあり傳伊勢国住人佐藤民部とゝふ者の娘頼政公の墓と尋ね此所ふ来入定まと云石碑ふ大地位尼善智入定伊勢国の住人ロロロ娘大永六丙戌年二月十八日享保九年造立と見ゆ

頼政石塔　本堂より左り少し奥の方ふあり高四尺余五輪ありて文字磨滅して不分云傳ふ正保の頃井上筑後殿建らきし唐ありと

昔此寺ふ六坊あり今其地名残まり　安養坊　住持坊　山中坊　瀧本坊　大仙坊　鷄見坊古く掘本坊と云一由治兼の頃斯改とゝふ

天正の頃當山焼失して寺寶縁起残らず灰燼まといふ

又云此里へ往古京都の官流飯岡豊後守尊經といふもの天平年中此里ふ來り開發せし地也と云飯岡家今猶存す

神崎橋　印幡郡舩尾村より千葉郡佐山村へ架まる印幡江へ此所ふて盡橋より上へハ高瀬舩通ぜず是より利根川落口安食まで七里佐倉の鹿嶋橋まて四里半とゝふ

是ヨリ印南

平戸橋　平戸神村の間ふ架そ是より檢見川海迫堀割開發

天明五乙巳年四月の古繪圖ふ平戸橋より檢見川海まて堀割長九千六百廿六間四尺五寸床六間深三尺より六丈三尺七寸まて新開反別三千百十三町五反一歩余と見ゆ去年西沼侍従の此事を與りて堀しめ給ひぬきど終ふ事ふらずして止ぬ其後まゝ天保十四癸卯年水野虎五家の大名ふやして七月廿三日より鍬初して堀しめきど事ふらずして同閏九月二十三日ふ止さり

米本城跡　米本村ふあり佐倉風土記云距佐倉西南三十里六丁一里村上氏世據之永禄元年三月十三日城主民部大輔綱清自殺而城廢焉

村上綱清墓　米本の長福寺ふあり綱清ハ民部大輔ふあり天文弘治の間米本の城主たり永禄元年三月十三日自殺まる同書

印南

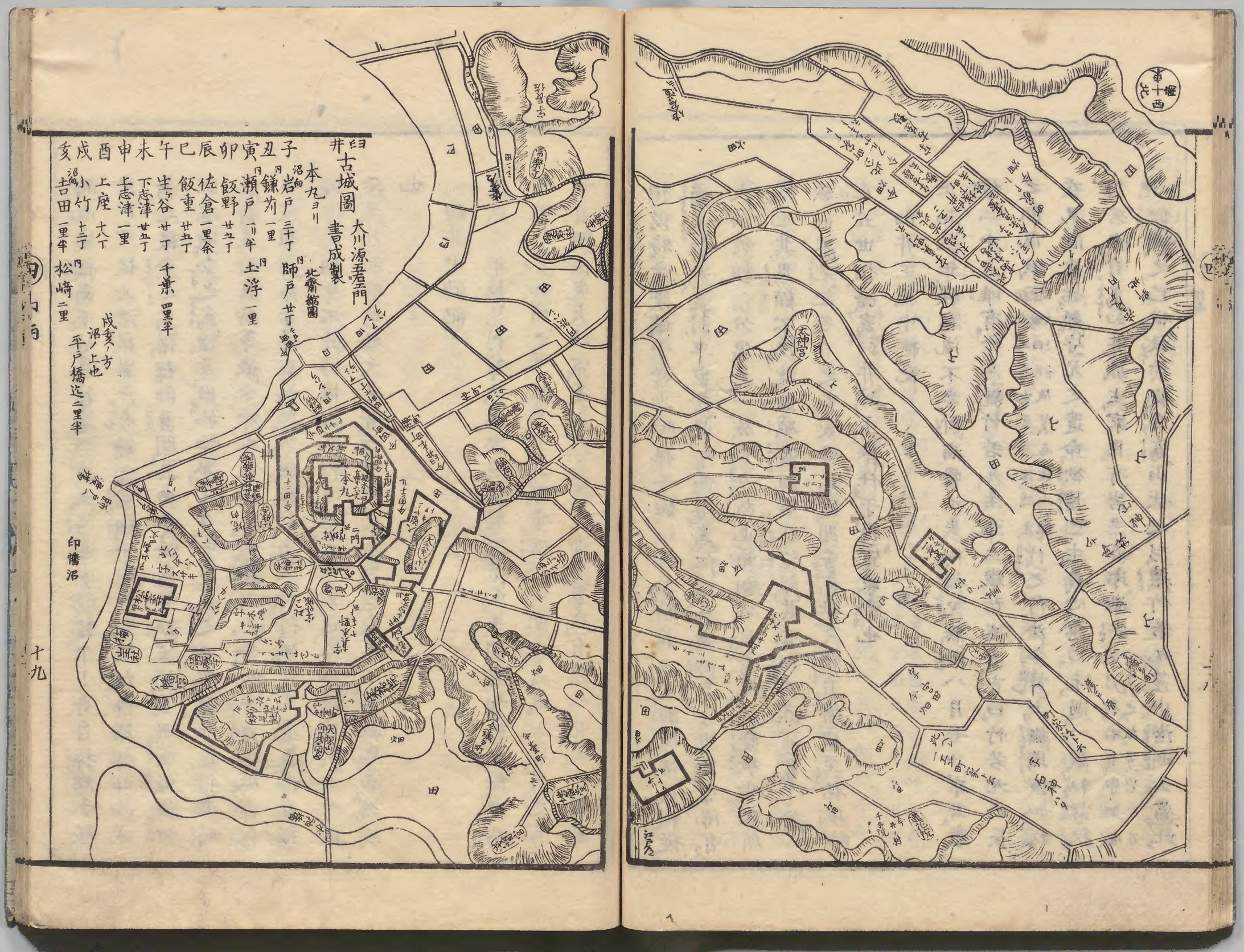
臼井城跡　臼井宿の臺ふあり。佐倉より一里餘西北の方あり。予一日臼井ある大川源五右工門書成の許を訪ひて臼井の城跡を問ふ書成筆をとりて今の有様を図して予ふ示す則ち是を北齋ふ縮図ありしめて左ふ出す中〻同所田應寺ふ傳ふる舊記を見せらる用を摘て爰ふ出す

臼井元祖傳

千葉介常兼分付三男常康于數箇之庄園（角一来、飯重、井郷、羽鳥、亀岩、栗山、長岡、内黒田、鍋黒田、生谷、物井、下志津、上志津、上座、小竹、井野、青葉、先崎）爲臼井城主因之號臼井六郎次于千葉介上總介之大族也此臼井城也者前廣野瀚々後湖水漫々左右谷廣而深山絲而曲其雖尽人力豈如是堅固哉有利自守無使敵攻南望生谷之（小字保貝林名）松呈千年瑞北顔印幡波傳萬歳之響城郭周迴三里餘印西隅水一里許誠是名城也勝地也常康奉仕于頼朝公有勲功頼朝公爲大庭敗軍憑千葉到下總常胤將一族以相從時常康嫡子常忠（太郎）孫子與一等平騎兵三百與常胤同相從爾來前爲追討平家粉骨于西海爲征伐奉衡碎身于東國常胤有大功於頼朝公偏是一族合力故也頼朝公於常胤其愛敬世之所知也其恩顧不淺故餘威遍親族但恨雖其有功労者被書千葉一族而不見記各自之名羨譽不遠聞芳声無久傳自常康至祐胤四郎凡五世相續爲臼井城主奉仕于將軍家者也

臼井正統中絶記

正和三年秋祐胤不幸臥病醫治失術禱祝無驗八月七日卒去歳僅二十五唯有一息號竹若丸生年三歳祐胤遺言曰竹若丸成長之間胤氏（祐胤之弟也爲志津城主次郎代之行法令憐士撫民須如我在日）胤氏始雖守兄之遺命欲情已生義心忽亡昧過一歳私謀殺竹若丸自爲臼井城主家臣有岩戸五郎胤安（岩戸村名有印西胤安居之故号岩戸五郎）側聞之已欲殺前夜自爲山伏之形藏竹若丸笈中潛逃去當此


古城圖
大川源吾門
書成製
本丸ヨリ
北齋縮圖
子 沼向 岩戸 三十丁
丑 鎌苅 一里
寅 瀬戸 一里半
卯 飯野 廿丁
辰 佐倉 一里余
巳 飯重 廿五丁
午 生谷 廿丁
未 下志津 廿五丁
申 上志津 一里
酉 上座 八丁
戌 小竹 十二丁
亥 吉田 一里半
師戸 廿丁
土浮 一里
千葉 四里半
成亥ノ方 沼ノ上也
平戸橋迄二里半
松崎 二里
本丸
二門
印幡沼
天神宮
十九

時亂安禱爾于妙見菩薩願其無恙亂安載叟于小舟自棹湖水歸岩戸然後又潛出岩戸奔鎌倉直詣于建長寺偏賴佛國禪師約成長之後令之爲僧禪師具聞其由愛憐養育如父於子漸長而後禪師不欲令之爲僧是出於恤孤之有實遂使之元服號左近行亂時告訴基時負時等欲令歸本領之地雖然天未命歟事終不成禪師示寂預謂弟子佛眞禪師曰願續我志扶持行亂因其遺教佛眞禪師亦恩顧厚不異佛國禪師行亂掌辛味若送春迎秋空終二十餘年至此時歷世之文書皆亡累代之珍器悉失是幼爲孤且遇禍故也

臼井中興記

建武二年秋足利尊氏奉詔追討時行下向于関東相戰十餘度時行敗北不知所之其後尊氏兵威重壓八州関東之武士皆屬之尊氏自稱征夷大將軍奏討義貞義貞亦奏尊氏有逆心依之京都邊騷動時佛眞禪師與行亂相議曰尊氏卿者必主天下之器也此度相從以抽軍忠可達著錦帰之望於是行亂將精兵五騎而屬于尊氏卿其費用咸出于建長寺一山緇侶相集毎朝誦尊勝陀羅尼百遍以祈行亂有戰功而還本領地其功德豈徒然乎然後延元元年二月尊氏卿摂劣豊嶋合戰失利敗走赴于筑紫菊池武俊率九劣之兵於筑前國多々羅濱與尊氏卿對陳尊氏卿曰敵軍衆而強我兵寡而疲自運命今日已窮矣於是行亂以爲吾拔戰功遂素志正當今日戰場也不是因神力何能之乎敬念我家守護神且禱之宇佐八幡及宰府天神自誓曰若功不成則使我速戰死生而何爲主從六騎直先登大破菊池軍其勢絶比倫所謂如以礫投卵豈是人爲實知神助菊池敗比而後九州怕其兵威悉屬于尊氏卿其感悅不少乃約行亂云我脫今日之危難偏在行亂之忠功後來天下歸掌中日再歸本領地

謝之其誓約不可變也天下已定之後曆應元年秋尊氏卿舉行亂任從五位下行左近將監爲臼井城主歸賜世所領之地且有可改行亂爲興亂之嚴命言是取再興廢家之義也又命千葉介貞亂曰速可使亂氏志津退去而守爲臣之禮義嗚呼天運無不復興亂再爲臼井城主其昌榮又如昔時謂之臼井中興也

圓應寺草創記 并八幡宮天神祠造營

興亂再爲臼井城主而後自心以爲我中興之功成者元是佛國禪師之撫育佛真禪師之扶助也其恩之不可忘也不唯是我永至子孫亦猶可追憶於是招請佛真禪師住持于豆州國清寺以爲開山新立精舍山號瑞湖寺名圓應且寄附領地十之一興亂事佛真禪師恰如子之於父晨省旨定所謂能竭其力者也寺與城隅一池爲之橋使其往來有使也又預自心期我若生子以其長先爲僧嗣法佛真禪師併是欲謝恩之有餘也道菴和尚傳云興亂之長子曆應二年己卯十月二十四日誕生從少爲僧法嗣佛真禪師爲圓應寺加焉多々羅濱戰功偏因神助故奉勸請宇佐八幡宮及宰府天神于臼井長致報賽八幡宮有城南其山号八幡山其寺号滿藏寺以爲別當令掌神事八月十五日有祭禮也興亂初相地于此時自以所携之楠樹枝植地曰若此楠樹活而生葉以爲靈神來格之證然後其樹繁茂碩今神前有是周三丈斗其妙不可測也又於城中草創菅神祠修覆妙見堂以八月二十五日祭菅神以七月二十二日祭妙見自致如在之禮矣想夫興亂之爲人也其誠能感二神其勇忽挫三軍幸雖爲中興之祖自處富貴長記爲郎當之身他恤寒饑大抵以數件支平生之志行其可察也此外舊記雖多不悉繁以畧之○諸国圭齊録下總国禪宗寺二十右印幡郡臼井御圓應寺

大捕樹 右古城跡の内西北の隅ふあ已側ふ山王權現を祭る捕の周圍五大餘。ま〻東の方へ九尺斗り隔てめぐり一丈ばかりあるなが二本あり枝の根付たる物あり と云り。其奇なる支図を見て知べ—

臼井
大樟圖
周圍五丈餘
東方一丈餘

国立公文書館
National Archives of Japan

むゝし此樟のもとゝ。大蛇住て折々人を捕食ふ。何人の退治したりけん。其大蛇の皮ありとて方二三尺斗ありて。鱗ハ四文錢程ある様。同所の寶藏寺傳へ持り。予も見侯ほどく尋くゝ。如何したりけん。近頃ハ見せぬと云り

大田圖書墓　臼井圓應寺の西古城跡ふあり。舊記云備前守俊亂前爲臼井城主時文明十一年己亥正月十八日太田道灌江戸城主將二階堂七黨等一萬餘騎兵渡市川來臼井圍城俊亂預聞知之故設備侍馬千葉介孝亂引援兵來共守之道灌良將也俊亂亦良將也彼此盡計畧攻守爭戰功相戰十餘度勝敗未決春過秋來長尾之麾下數國之武士來共援守七月十五日大戰道灌之兵伏尸數百躬太田圖書戰死道灌悅力攻軍失利敗北（太田圖書墓有臼井郭外蓋是所戰死之地也里民有疾疫則祈之無不應夫生有勇力者死有神力乎）自是俊亂声名高世間威風奮於國中者也

おさつを　古城跡より東南の方。一町斗ありて。田の中ふ石のふ祠あり（古ハ此邊ミなふ芦原ありと云）里人おそれさゝといふ。唉の出る人ふ此祠ふ。焦椒とお茶を奉りて祈念をゝ奇妙ふ治るといへり。その故ハ。正和三年當城主臼井祐亂八月七日不幸ふして病死ス年十五子息竹若丸僅ふ三歳祐亂の弟亂氏（志津城主）遺言ふよりて。竹若丸の後見とふる。亂氏始めハ兄の遺言を守るといへども。忽ち逆心を生じ私ふ竹若丸を殺してミづから臼井の城主とふらん事を謀る。ふおさつといへる下女ありけゝやくも此支を知りて岩戸五郎亂安（西岩戸城主）ふ告ぐ。亂安大ふ驚き自ら山伏の姿ふつくり。竹若丸を笈の中ふ藏し。潛ふ逃去て鎌倉ふ去り。建長寺佛國禪師ふ養育を賴ミ生長の後本領の地ふ歸らゝめんと欲そのち足利尊氏ふ屬して本領安堵せし。臼井左近將監興亂といひしいもの竹若丸の支ふりさて臼井の城あそい

下女のおたつ後見亂氏の密謀殘岩戸五郎に告なる支頭へれ
しゆゑ亂氏大に怒り已におそれ危くも
その場とのがれ私に城をぬけ出印幡江のほとりふる芦原の
中に隱る亂氏あとを追ひけ搜し求むれども曾てあきらめ此時
おさり誤て咲をきさりしかば亂氏に見付られ直に首を討き
しとあり。里人甚く是をあはれみ其所へ石の祠を建てあきと
おさりさぬといふおさり咲と出そゝく支此故なり。依て咲の
念願ゆゑふ支をさやら也といふ

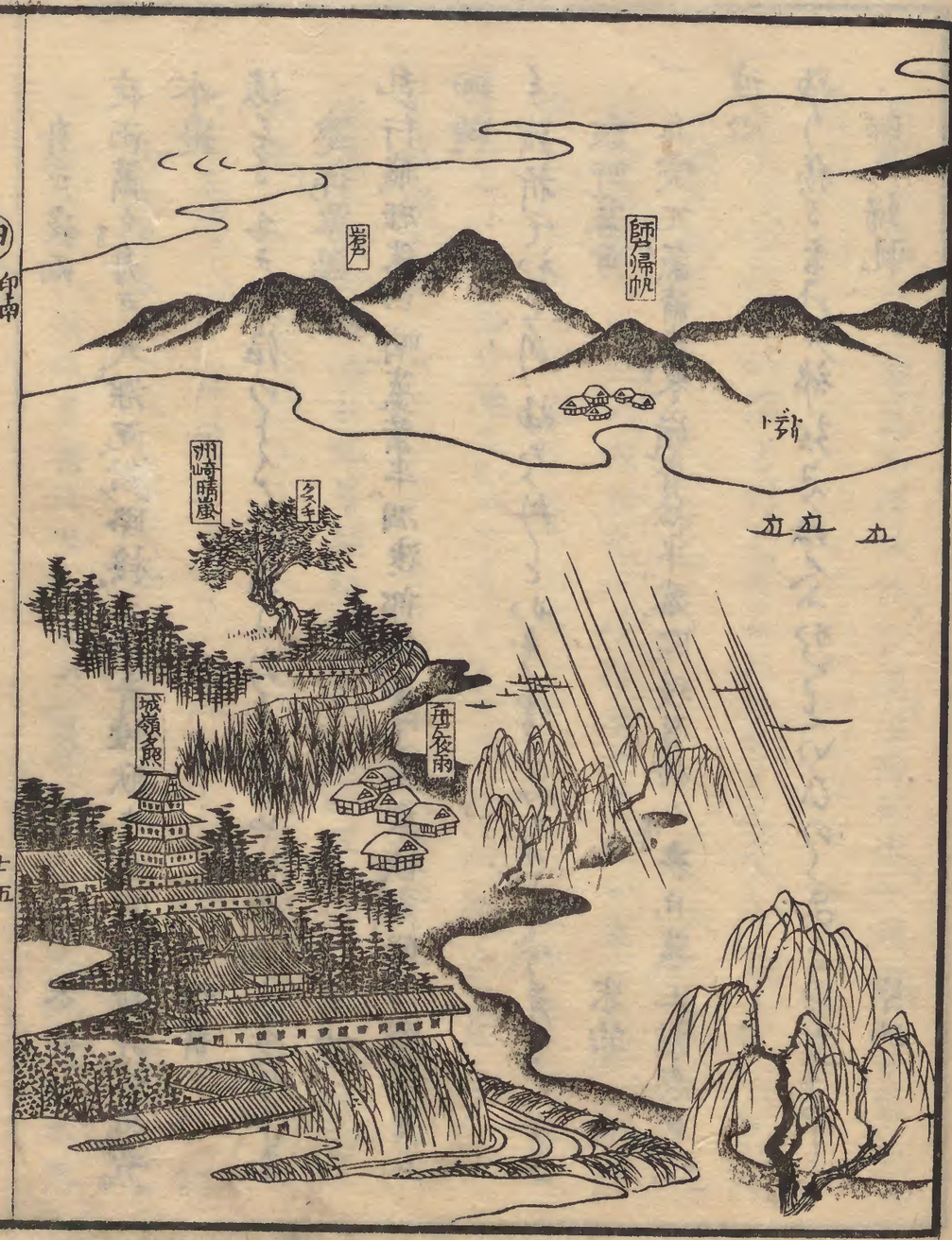
臼井八景 并序

下總國臼井鄉瑞湖山圓應禪寺者中興城主平行亂有故所草創
之精舍也境地靈景色絶後負古城喬木脩竹圍遶前抱湖水閑鷗
浴鳧浮淤晴好雨奇之有餘日涉夜遊不飽若試謂之趣東望飯野
霽雪西映舊基夕陽浮萍斷金玉流瀨戸挂影晴嵐吹瑟琴響測崎
松聲光勝疎鐘報暮諸戸片帆促飯沙平水淺旅雁下遠部秋夜靜
雨暝漁翁繫舟戸岸加馬春待花木曙隻納竹陰涼遷喬鳥咨嶺蟬
秋愛楓林酒冬和樵路之歌曠野蛩寒汀鷺驚大凡四時之佳興一日
之眺望變態萬千不遑枚舉者也 僕 投老于寺前濯懷于湖水已五
年于茲矣寺之僧的公者方外舊識也乘興共消日於吟境訪殷復
終夜燈前問遺世之樂大且無窮公常恨言此多景地無詩人之詩
無歌人之歌者何其闕乎若不補之風流之罪也歟於是遂賦八景
以示之一唱則如坐夫勝地信所謂有聲之畫也後見此什人不可
無詩不可無歌公曰請僕亦題之見義豈黙止漫綴詩歌以附佳作
之後自顧東施顰也竊要鮒蝦蟹一啖不可食者以釣金鱗所願在
焉時

元禄十一年十一月晦日

臼井隱士 信齋 叙

潮秋月
飯野晴雪
光勝寺鐘
原田塚


師帰帆
岩戸
洲崎晴嵐
城嶺夜雨

舟戸夜雨　宋的

夜雨蕭々舟戸天深泥封路接平田青燈耿々漁窓外幾許浴鳧喧

水邊　信齋

漁村の戸口泥のふかきにやぬまてくやゆの泥ふかしき

遠部落鴈　宋的

乱行飛雁落田疇蘆葉半凋遠部秋貧子稻粱欲充饉沙頭倦翼且踟躕

手折て花とり物たりとかぞふまぶみちてとゝ花ゆ丁ゲ

飯野暮雪　宋的

一丘突兀氣蕭森冬嶺青松半落陰瓊屑紛々衰日暮玉龍忽見偃波心

物ゆ残る雪ゆ夕部弦ゆぬくゆかくといひのゆ雪ゆ

師戸歸帆　宋的

布帆一幅泛清灣萬頃煙波往亦還潭面風休如鑄鏡影含翠黛漬前山

ゆゆ人の往ゆ波里ゆ行ゆ舟のゆふゆくゆくゆ多くゆれ

瀬戸秋月　信齋

晴湖漂影月如流殘漏惜光人倚樓瀬戸清風今夜景吹教我嘯洞庭秋

ゆゆ月ゆ海の湖もかくやらんゆ月ゆ海ゆ月ゆ

城嶺夕照　宋的

空見平湖與攢峰昔年層閣總無蹤孤城返照紅將歛近市浮烟翠且重

以く夕部入り城峰ふゆゆゆゆゆゆゆゆ古跡

光勝晚鐘　信齋

一遍宗風已儼然星霜五百有餘年鐘聲遥響孤雲外知是稱名落

日前

[illegible]

洲崎晴嵐

掃盡江山絶嵐靄朝來子細見洲崎聚翅鷗鷺平沙上交葉蒹葭淺水濱

[illegible]

跋

大凡有名無實者異方景物也茲吾蘭若門外瑞湖者不減瀟湘之佳趣而永超洞庭之逸興矣然今古東夷之境而冠蓋無題艷志緇素靡伸雅情故富景不富句貧吟不貧興嗟乎孟有實無名者乎此故與信齋徵君繕錄逸餘稗補闕漏而製作積而俱成於燈前之一軸皆是翰林主人子黒之客卿不可得緘默者也焉時

元禄戊寅之冬　　官亀子　　爲之跋

鹿嶋橋　角來より佐倉田町へ架をかしぬ川といふ。物井川の下流ふして。是より東一里餘ふして印播江ふ入る

物井川　佐倉風土記云。在印幡郡二源皆出上總國六自野呂來歴田谷當北流十餘里而至坂戸一自吉倉來歴大谷流用草七曲巖富西流十餘里而至坂戸二水相會入馬渡橋下又西北流六里爲物井川出于小名木細流過鹿渡亦會于此而北流三里至羽鳥又與高崎川會遂北流於城西過鹿嶋橋六七里而入印播江

高崎川　同書云二源一出於文違高松之間西流過下勝田橋下十許里歴高崎南一出立沢南西流過飯積橋下坤流十餘里過高崎北二水會于高崎西又西流過高岡歴真田橋下流于城南會于物井川俱入江

佐倉　印播郡ふり入口ふ鹿嶋橋あり。橋と渡りて田町ふ入る。田町の中程右の方ふ田町御門こゝ海隣寺坂茂上ハ海隣寺元

木に至る此所武家町なり。横町より左へ曲り新町・角町・弥勒町・本町本佐倉町とへて酒々井に至る。是より中川・戍過て成田に達す

佐倉風土記云城在印播郡之中而稍近西舊戸鹿嶋山其為形勢居高陽臨原濕阻要屏翳足平遠通面卯背酉左右子午前置市廛曰田町曰新町曰彌勒町曰本町曰本佐倉町曰酒々井町是曰佐倉六町農賈相雜民庶安堵至京師八百有八里距江戸七十九里東南至上總国界四十二里東北至常陸国界亦四十二里西北至下野国界五十四里西至武藏国界七十二里六丁同文略昔千葉介平常胤より輔胤に至る迫代々居千葉輔胤城を佐倉郷將門山に移す其後胤富相鹿嶋山之要阨使邦胤移城于此築營未成邦胤卒其子重胤幼冲天正十八年與北條氏共敗于相模國小田原城東照大神祖賞鹿嶋山之形勝遂命利勝土井城之慶長十六年春正月十一日興功七年而成矣名佐倉城云

諸國圭齊錄下總國時宗部に三十石印播郡佐倉郷海隣寺又三十石同郡同郷清光寺と見えたり

土産　佐倉炭　蒟蒻　三度粟　野駒　蕨　初蕈　松露

本佐倉城趾あり。今の佐倉に對し本佐倉といふ。佐倉風土記に千葉介輔胤千葉より城を佐倉郷將門山に移すとありて注に在今城東六里餘捕本佐倉とあり

年封武田信吉于此建館於本佐倉大堀居之云と見えて其後慶長十六年鹿嶋山今佐倉城に興功七年にして成の後大堀も廢せしなり今本佐倉に續きて大城濱宿大佐倉御廐ふとあるべし

諸國圭齊錄下總國曹洞宗部に二十石印播郡大佐倉郷勝胤寺と見えたり

新義眞言に二十石同郡大佐倉郷寶珠院と見えたり

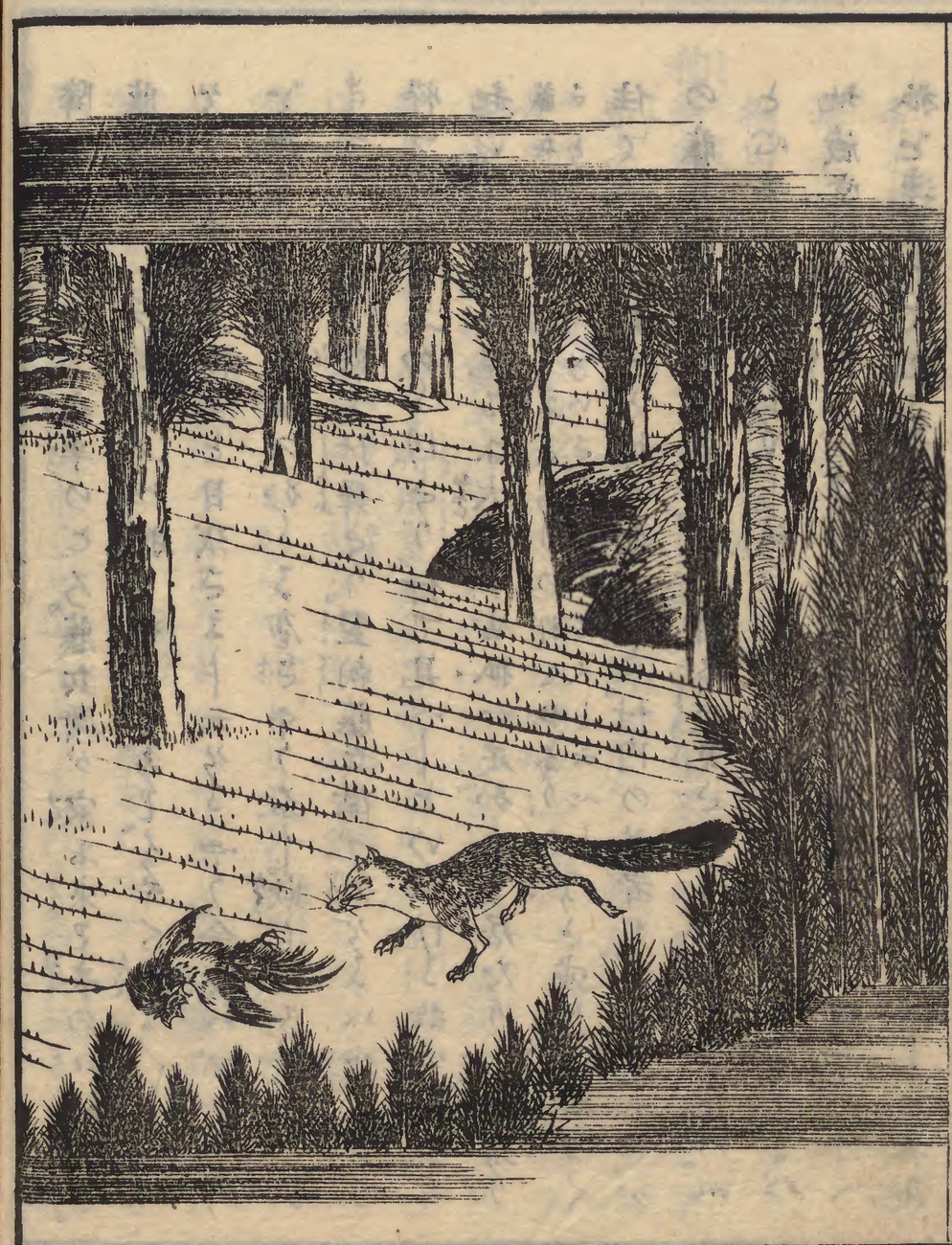
將門大明神　將門山にあり。平將門を祀る故に社を以て山の名

もと云、石の鳥居あり銘を刻して曰、奉寄進將門山大明神石華表右柱 美應三甲午天十一月日總務印播郡佐倉城主從五位下堀田上野介紀朝臣正信左柱と見ゆ例年八月三日祭禮相撲あり

稲荷藤兵衛　佐倉より一里餘り東の方墨村の百姓なるもの男常に狐ととる事を妙を得あり故にたうう藤兵衛といふ物類称呼世俗さつ狐ゆうりの神使なりと称るあるべ故に稲荷の二字を音にとふへてさうと藤兵衛常に自分居屋鋪の裏にブツチメ仕狐を捕る我掛らへ置此所へ仕かけ也来りて捕と云ある時用支ありて常務水戸へ往一帰るもおるを

けの原にて狐に出逢一故おの狐を欺一誘して我が家へつき帰り裏山のブツチメにかけて捕一とあるも此道法十里あまり在てその内に舟渡三ケ所ありといくりぞ或日藤兵衛千葉野を通るる時狐に出逢一故欺一来るてブツチメに懸んとおたり〳〵が古狐ゆゑ中く乎安くかゝらず一両日過てその狐

隣家の牌に化て夜半のところ藤兵衛が家に来る表の戸を叩き藤兵衛くく。ブツチメへ狐がかゝつあるもやく起よ〳〵と云ゆゑ藤兵衛ふと目覚さまし云ゆう今夜ハブツチメを懸そぶつたり狐のかゝる所さやうにふ一欺一おるぞといひて〳〵偶然と寝て仕舞さり翌朝藤兵衛が云ゆうハ夜辺隣の牌ブツチメにかゝりさり行て見べしといひける故家内の者起りて至り見るに大なる古狐一疋かゝり居たり〳〵とあり藤兵衛めざとく狐にふとあるの牌を狐ありと即智のあいさり誠に名人と云べし〳〵或村に狐多く住て人家の鶏にふと捕り食ふゆゑ村内の若者ども相談して藤兵衛をたのみ来り狐を捕る所見さきよ一望ミけきべ。と心安き支あり〳〵一旦を仕方して捕て見せ申べしとて地蔵堂の庭の脇にブツチメを仕かけ置我ハ山に到り此所へ狐を連来りてとる故各々ハ此堂の内にて見物せべ一と表に



国立公文書館
National Archives of Japan

竹のそだきをさげ。大勢この内ふ隠き居たり。藤兵衛いやゝて
支度と〳〵のへて山ふ入。酒ふ酔さる声色あて大声あげきつ孫
へおらぬ。狐ヤアーイたうふをゆくめぐりあひさやあど、
さんぐふ呼りふぐら山中迷名ぐりありくふ。程ふく藤兵
衛。狐をつれ大酔の身ぶりふてうの堂の前ふ出来りぬ。腰ふ二尋
ばかりれ縄をつけ。その先ふ鶏の死しあるを結ひ付よろく
〳〵として引ぎりあるく。狐ハ是を捕らんとして後ふあり前
ふあり矢まハるあゞて藤兵衛懐よりおまをを落そこハ大切の
物を落〳〵ちくちゆうめうぬふ食きてはあるとのうはう
はくハるるまゝ。ふど〳〵をとり言〳〵。ゆれおはめを捨ひふ
ぐら終ふたふき卧〳〵たり。狐ハそろ〳〵ばへより。捨ひ残〳〵
おゐめ残とり食ひ。又後の方へ廻りてゝの鶏を曳く。藤兵衛目
ぬ覚〳〵。足をあげて是を追ふ。かくをる度々ふり。狐ハ恢きて

側のブツチメを近よりたハらくやうをを伺ひ段々とふりへ
這入幾度も白ひとうざ終ふ餅をくハへて横とひふ飛つをを
其柏子ふ刎木をつきてブツチメをうをうぬ其自由ふるをと實
ふ座舗の猫と嘲嗤をるう如し。予藤兵衛ふ逢し時餅ハ何ふる
哉と尋さきハ鼠の油揚ふりとハくり然るや
佐倉の儒臣窪田某狐藤兵衛の傳あり云城之東墨村有猟者名
藤兵衛善捕狐人呼曰稲荷屋稲荷司穀神也或謂神即狐也或謂
狐神所使故謂狐亦曰稲荷以藤兵衛捕狐人轉曰稲荷屋云稲荷
屋取狐不施罠罩不持弓銃為製大扳方丈餘設覆数所巨石加其
上以助其重而少開其端支以小柱繋柱以縄繋縄以餌狐来食餌
縄動柱仆從而覆落焉以是狐多壓死又時持餌遠出稍而所之常
夜出有邑小吏山崎由良治者継至烏大叱藤兵衛曰藤兵衛汝農
而不為農好害生数且狐性霊過於人狐不嘗害若其害狐如此而

不止得殃不少矣。言畢而去藤兵工惶伏謝罪。既而思之。日余之出也。則以夜至也則深山。非人可至。乃豈老魅誑余乎。因往来誠把所特餅投之。若有就而食者大喜。且投且行。既至覆所。則吏死于覆中久矣。藤爲帶。双扶在腰。而形已爲狐。尾曳脩々也。由良治爲吏。威信行於民。故狐化其形。籍其威以遏其害已也。於是藤兵工名聞乎近郷。數里間野無柱之跡矣。

窪田子曰。藤兵工之事可謂怪矣。然此余之所親聞見而可信者。藤兵工嘗云。城中多狐。使我掩殺數日。則積屍如山。快哉言也。夫城狐社鼠人之所共惡。而不能去者。何也。彼其所託城社也。所負人主也。負人主之威。而託城社之固。以行其盎魅妖誑之術。雖有猛獒。將垂尾聽命之不暇矣。尚安得而除之哉。然則藤兵工最爲之將如何。曰餅而誘而殺之而已矣

酒井町　佐倉六町の内なり佐倉明細記ハ天正十九辛卯年酒井町建御入国初メテノ取立町ナレハ未久ク榮ユルヤウニ可仕旨　両御所様ヨリ大久保重兵工ヘ仰付ラル、間酒々井篠田大隅其外年寄共ヘ下サル、證文状有之中略　船著モ先年ハ濱宿御湊ナリケル處新堀舟戸御取立下ザレタリ下略

佐倉風土記云慶長中酒々井北開渠引印播江而著舟於酒々井而今渠廢只存新堀名耳漕在二道一登戸達佐倉南三十里寒川並連而在海畔此浚海西南五十里達江戸最爲捷馬一大櫻濱達佐倉東六里浚印播江北十八里而至利根川而左沂之過木下歴関宿南折沿市川入海而達江戸馬右從流而下者歴滑川金江津神崎佐原小見川而至銚子入東海又右則過上總而安房武藏左則通於常陸陸奥

中川　佐倉風土記云出自印播郡尾上乾流而十里過中川而入印播江此處より印播江花島山へゆく遥らゝ筑波山を見也

大佛頂寺　岩橋村ホあり創造の年時詳ならず弘法大師大佛頂の法を修する處なりといふ諸國圭齊録下總国新義真言部云十石下岩橋村大佛頂寺とこゝ也

野馬取　牧ヶ所あり其日ふ當りてい遠近の老若男女郡集して見物せ。佐倉風土記云駒野駒爲良家駒次之其野駒在坰南者自千葉野以東至根古名北者酒酒井以東至寺臺曠原縱衡各三四十里風牧于所々官籍其牝牡消息之數皆有厲禁歲之六月吏来取之其執之處謂之込字書無此字俗用此爲押入之義有古米古死二訓此訓古米込凡七處曰内野曰高野曰柳澤曰取香傳古之摺墨者出于此曰小間古曰矢作曰油掛是也毎込三四十歩四圍築防傍開二門及時列卒呼噪牧士數騎驅逆之或百或數十以聚一所而納諸込乃官吏監臨命牧士簡擇毛物不可者驅出之可者留之一人竿頭繫繩纏駒首又一人躍上駒背急抱其頸仆之執之盡其込而止矣牧士數十又散居村々

三度栗　原野有之樹不高子亦小春生夏華秋實冬和薪苞之孟栗屬也同書此栗一年ふ三度實をむすぶ故ふ三度栗と云又冬春の間野を燒時落栗自やける是をやけ栗と云亢爲珠

成田山新勝寺　埴生郡成田村ふ在り不動明王二童子を祀る弘法大師の御作ふして始ハ山城國高雄山神護國祚寺護摩堂の本尊ふり故ふ靈驗甚多く世ふ知る所ふり昔宋崔天皇天慶二年相馬將門亂を起し、時廣澤遍照寺の寛朝僧正ふ命ド調伏の法を修せしむ乃この尊像を奉持し難波津より海ふ浮び將門ゞ新都に程近きこの處ふ在て調伏の護摩を修せしゝバ感應忽ふ顯れて明る三年の二月將門終ふ伏誅せりこの後僧正尊像を奉ゞて歸洛せむとするふ忽重くして擧ぐる事能ハず且靈夢の告あるを以て永くこの地ふ留むり勅して伽藍を建て高雄山の寺號ふ准ゞて神護新勝寺と號す猶緣起ふ詳ふり佐倉風土記云。不動堂在成田。曰神護新勝寺不動明王坐像長六尺。弘法大師所刻。本爲山城國高雄護摩堂之本尊。以下の文意緣起ふ同ド故ふこれを畧す

成田山
神護新
勝寺
不動堂
光明堂
奥院
本堂
天神宮
観音
御滝
二王門
大師堂
正福院
かさや
田丸や
るくや

上町
本坊
祖師堂
延命院
大師堂
通路院
弁才天
さらや
ひーや
ふくや
一粒丸
大つろ
ふぢや
えやーや
小川や
ふさや

相馬日記巻三云抑坂東ふ不動明王の古靈場三所あり相摸國大住郡の大山寺と武藏國多摩郡の高幡寺とこの新勝寺とかり中畧今三所の中ふこよかう參詣人多ろるハこの成田の靈場かり

常總軍記巻廿二義長計畧千葉勢敗軍條云これハ天正十三乙酉年常陸國河内郡岡見の岡見中務信貞の臣栗原下總守義長下總國海上郡高田ふ於て同國佐倉千葉新介勝胤の將烏居筑後村田兵衛荒海左衛門を破りー事をいへる條かり三陣の大將荒海左衛門最勇士ふーて是ハ荒手ヒいひ慎深き者ふて酒ふも醉ハざりれるがこの軍ふ出でーろども敵ハ潮の湧くが如く威勢強く大將烏居村田を討ちーかバ物ヒとせずーて荒海が勢を取込めて火水ふかれと攻めーかバ荒海自勇を振ひ敵を數多打取りその身深手淺手十三處ふ受けて今ハ心身疲れて岸山の谷へ轉落ち微塵ふ爲て敵ふ首ハとりれざれども終ふ討死ーゝりれる中畧爰ふ荒海左衛門ハ軍敗じて郎等死骸を尋ねーろども曾て知れざりれる荒海ハ岸山の谷の底ふて死ーれるふ不思議かるろか何方よりとも無く十六七歳の童子二人來りて荒海が死せー屍を撫でゞふふ忽荒海息を吹返ー蘇生せり餘ふ不思議ふ思ふ故ふこの邊ふハ見も馴れざる最氣高き小人達かり何處何かる所よりろ來りせゞひてかく我を憐みゞふふや更ふ不審晴れやりず御名を名のりせゞへやと申ーれる二童子微妙の御聲ふて我こそ成田不動明王の御使矜迦羅制多迦の二童子かり汝明王を信じ奉る事餘人ふ超え常ふ歩を運ぶ志我が誓願豈空からむや荒海今度軍事ふ出で深手を負ふて今既ふ死すと雖定業ふ非ず急ぎ行きて助くべーと佛勅を蒙り來りゝり汝必疑ふ事勿と仰ありて光を放ちゞひて成田の方へ飛去りゞひりり左衛門夢とも現とも分け難く信心肝ふ銘じ御迹を伏

仰とれるふ不思議や歩行もかりざる身の何とかう邊かりー
木の枝ふ取付きて立ちーぐそれより歩み出で一足づゝ運び
行きとるふさーも十三所の深手かれども苦痛も更ふ無くた
どりくて道ふ出るかゝる處ふ左衛門ゞ家子堤戸平大夫牟礼
半四郎兩人いせめて左衛門殿の御死骸を犬烏の爲ふ爲む事
も忠おきふ似さり亂軍の紛おれバ若やこの谷底ふて死ーゆ
ふふや尋ぬべーと薜蘿を便ふ取付きて尋ねるふ左衛門ふ
巡合ひーゞ手を負ひー枝子も無く最不審かりーゝバいゝかな
る事ふやと問ひるふ左衛門感涙やるせかくーてまがくの
由物語せり兩人も奇異の事ふ思ひ且恙おきを悦び負ひまゐ
らせて荒海の館へ（下總國埴生郡ふ在り）歸りたるゞ左衛門ハ太刀疵鎗
創の迹ハ十三所ありくと若きーゝども只凹みさるばかりふ
て血も更に走りず痛も無かりるハ不思議といふも思おり

縁起云總州生實大巖寺の開山道譽上人ハ天性愚鈍ふーて學
業の進み難き事を歎き嘗てこの尊ふ歸依ー參籠持念する事
百日期滿ずる夜の夢ふ不動尊持ちゆふ利劍を呑むと見て即
覺めさり覺めて後これを見れバ黒き血流れて床の邊を穢せ
り然ーて後慧解人ふ勝れ終ふ大德智人と爲りゆふとぞ（佐倉風土
記不動堂條云、傳、小弓大巖寺開山道譽、自患資鈍、禱請百日、夢呑明王劍、血流滿床、然後慧辨邁人、其袈裟猶在而血痕黯然云、）
祐天大僧正御傳記（古岩南枝著）卷一云團通和尚祐天剃髪ーて日數
も過ぎその上祐天漸寺家ふ馴れおーゝれへバ徐御經をも教
へばやと思召ー淨土宗ふて初學ふ先教ふる三部經の字數三
五字づゝ口傳ふ教へゆへども中々一字も覺おーー此の如く書
夜教へゆふ事凡五六十日ふもおりれへども祐天いゝかる前
世の業因やり單の一字も覺おーー（中畧○この間祐天上人擯斥せられ既ふ入水せむとせー
を同寮の善長ふ諫められそれより増上寺開山堂ふ一七日断食籠を爲ー靈告を得それより成田ふ赴く事を記す）祐天

国立公文書館
National Archives of Japan

よく運の極ふや人里離れ一野原ふて路用袈裟衣まで追剥ふ剥取られ前後途方ふくれられしゞこの上又もいかゝる憂目ふ逢ふとてもかゝる大事の立願をおどろ無ふ爲一申さむやと少もおくるゝ意なく遂ふ成田山新勝寺別當の許へぞ着きぬふ急ぎ立願の趣別當へ精く御談ありれバ別當も感じ入り籠堂へ同道あり祐天悦く思召一南無不動尊誓願空かりずンバ哀愍納受座一て余ふ智慧を授けゆへ三七日のから断食身命を盡一祈請一奉る者あり願ハくハ結願のタふハ勿躰なく也不動尊體を現一ゆひ直ふ智慧を授けゆひ天下の名僧と爲一てゝびゆく祐天ゞ胸中を明鏡を照一驗覧有て願望成就なさ一めゆへと祈請あるぞおそろ一きこの間一七日の事を畧す祐天ハ猶も丹誠を抽祈請有り程なく二七日の願境ふもなりれれバ旅疲といひ芝ふて開山堂へ籠り断食致されそれより直ふ復か

くの如く断食二七日ふもなる事なれバ寂早御身も疲果て只生きゝる耳の有様なれども一心ハ日ふ勇まーく岩をも通す念力ハ畏といふも餘ありかゝる處ふ奇やある夕方ふ年七旬とも見えれる畏一氣なる姥出來り祐天くゝと聲をゝけ汝さこそ身も疲果め寂早心願も成就せむ何不動納受あらざらむ二七日満ずれバ速く國へ歸りれらへ其方途中ふて追剥ふ奪ハれ一鳥目一貫文袈裟衣まで我々取返一來れり此を持て故郷へ歸り學問出精すべーと有りれれバ祐天も不審晴れゆハずこハ忝き御厚恩いゝなる御方ふて座せバかくハ憐みゆふやらむ御名慕一くれなり然れども余ゞこの度の立願ハ懸命の念願ありて三七日のから断食是非この日數満てずンバ置くべからずよ一それまでふ飢死せバ本望よ必々御恤下されなと歸る氣色も見えざれバ姥ハ麓へ歸りれり暫過ぎて又出來る

ハ別當の僧祐天くと聲をゝけ汝漸身も疲れさり寂早立願成就せり天下の名僧と爲る事疑ふ事あるべからず三七日籠するゝおよバずこれより直ゝ立歸り學問出精するからバ世ゝ比ゝき智慧僧とゝるべし早とくくとのゆへバ祐天首を回らし愚ゝる別當の仰ゝゝ段々の御教御情ゝ似されどもこの度の立願ハ命を惜こ身をかばふ如き愚ゝる願掛ゝ非ず思詰めさる事ゝれバ必三七日籠り眞の不動の尊體を拜し智慧を授ゝり終るまで中々國へハ歸るまじ必御捨置下さるべし飢死ゝ及バゝ本望ゝりと血眼ゝ爲てのゆへバ奇や今まで晴れさる空卒ゝ震動雷電して岩を碎き石を飛バし御堂の震動たゞ事ゝらず祐天少も畏れゆハず一心不亂ゝ不動を念じ假令岩ゝ摧ゝれても一心の魔鬼爰ゝ止まり眞の不動を拜し奉らずバ體ハ微塵とゝらバゝれと怒の皆裂くるゞ如く口ゝ不動の御名を唱へ動ずる氣色ゝかりれる猶も奇ハ今まで別當の僧と思ひしゞ卒ゝその長一文許の不動と現れ御身より火焔を出し左右の御手ゝ長短の利劍を提げ善哉く吾ハ是成田不動ゝり汝ゞ丹誠無二の念力類ゝき事を感じ今現れて示す者ゝり汝ゞ前生の罪惡深き事二世三世死變生變りても盡る時あるべゝらず此ゝ因て今生ゝ於ても明盲とゝりさるゝり今より智慧を授ゝらむと思ふゝらバこの長短二劍の内一振呑て藏腑の惡血を吐出ざし新血を生じて生改めて智慧を授ゝれこの二振の中長きを呑むべきや短きを呑むべきや否や祐天愼で曰く短きを呑こても體を破らむ長きを呑こても體を破らむ何を呑こても體を破るゝ二ハ無し余長きを呑まむと大口を開て待ちゆへバ忝も不動尊咒を唱へゆひ右の御手の長きを情ゝくも祐天の口へ刺しゆへバわつと言ひて俯きその

儘息ハ絶果ヌれりかくて新勝寺の別當ハ夜もほのぐくと明れけれバ祐天の事を不便ヌ思ひ今頃ハ料身も疲れぬらむ二七日を滿てぬれバ飢羸れて死せむも知れずいざ訪ひて事問ふべーと籠堂へ參られて祐天の有樣を見ゆふヌ血ハ流れて體を浸ー俯ヌ伏ーて息断えさり別當仰天ーゆひーゞつぐくと樣子を見ゆひて是さゞ事ヌてハ有るまじこの籠堂へ他人の入るべき樣も無ー不動の爲さーめゆふからむと急駿の僧を集め即座の護摩を焚きゆひ不動尊を念じて曰く祐天小僧一念の誠心二七日ヌ滿つ願ハくハ祐天蘇生ーてこの有樣を明白ヌ明らーさびゆへとせめろけく祈りゆへバ不つと息をつきむくと起きて別當ヌ向ひ只今まで數々の御芳志生々世々忘れまじ立願成就ーて眞の不動の尊體を拜ー智慧を授ろりれありその外劔難の次第不思議の事ども一一ヌ語りゆへバ

一座の僧さち感じ奇異の思を爲ー別當も祐天をかき撫でゝ前代未聞の名僧やと感じゆふ事限ふー先御利生の實を見むとて般若經を一度讀ミて聞ろせゆへバ祐天これを聞取り固より知れるゞ如く一字一點の差も無く語じゆふぞ奇ふるこの書甚誤ありーを今大率正ーて引きさりさて同書巻四祐天上人土浦の淨福寺ヌて說法ありーを不動尊雷雨を起ーて拒ぎー事をいへり今これを畧すせーを不動尊雷雨を起ーて拒ぎー事をいへり今これを畧す祐天上人の事ハ祐天大僧正傳及び三緣山志ヌ精ー世ヌ一相無切有居士の祐天上人一代記として六巻あるハ戲作ふり又累女解脫の事ハ新著聞集巻五近世奇跡考巻二相馬日記巻二ヌ見えさり死靈解脫物語として二巻あるハ虛言多ー相馬日記巻三云成田不動尊ヌ詣くれて、御前の町家ヌ舍りーふ隣ヌ集まれる男女ども騷ゞーう物いひうちさるゞひて安寢るせさせす夜追の馬の鈴の音耳近く聞こえ櫳人らゞ丑のくびぞゞど言過ぐるハいさう更けぬるゆるべー

二童子の白きもひとり難陀花

蓼太

利根川圖志卷四終

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan